

## 木村兼葭堂の交際圏

——『兼葭堂日記』に見える武士に着目して(一)——

はじめに

有坂道子

木村兼葭堂(元文元年〜享和二年、一七三六〜一八〇二)は、造り酒屋(のち文房具商)を営む傍ら、多彩な学芸に活躍した大坂の文人である。書画・詩文・篆刻・煎茶を嗜み、本草家・博物家・蔵書家・収集家として著名であり、その名を慕って彼のもとを訪れる者が絶えることはなかった。日に三十名を超える訪問者を迎えることもあった兼葭堂の日常の様子は、『兼葭堂日記』(以下『日記』と略)にうかがうことができる。

『日記』は、兼葭堂四十四歳の安永八年(一七七九)以降、途中四年分の欠を除いて、六十七歳で亡くなる直前までの十九年余分が現存している。日々の動静を人名によって綴るこの『日記』は、世に名の聞こえた「聞人」兼葭堂の有り様を示す史料として、これまでもさまざまに活用されてきた。ただ、具体的な出来事が記されていないため、多くの場合は、『日記』に出てくるかどうかを確認したり、その人物と関係ある記事だけを取り上げるといった利用のしかたに限られている。『日記』の記載に相応する史料が相手側に残されていないれば、少なからず両者の交流内容を知りうるが、『日記』では、たまたま短く注された用件が推測の手

がかりになることはあつても、それ以上のことを読み取るのは困難である。そのため、これまでに兼葭堂との交際が取り上げられた人物も、両者の交遊に意義を見出しやすい著名人であることが多かった。

しかし、一口に『日記』に名前が見られるといつても、一度きりの人物もあれば毎日のように往來を重ねる人物もおり、当然交際の親疎がある。また著名な人物も多いが、大方はさして関心を払われてこなかった「無名」の人々であり、未だどこの誰かわからない者も多い。名の知られた人物との交遊の詳細を明らかにすることが重要なのは言うまでもないが、一方で知識や情報の結節点であった兼葭堂が、全体としてどのような人脈の広がりをもっていたのかを明らかにすることも必要である。『日記』を傍証的な史料として用いるのみでなく、『日記』そのものから交遊の実態や特徴を読み取ることも大切であろう。

とはいえ、延べ四万人を超える『日記』の人名を概観することは不可能に近い。そこで、ひとつの試みとして『日記』に登場する武士に注目してみたいと思う。武士を取り上げるのは、一つには人名以外の情報が少ない『日記』にあつて、官職名あるいは書き添えられる主家の名などから武士と判別しやすく、ある程度のまとまりをもつて交遊網をとらえることができること、二つには一町人である兼葭堂が武士階層とどの程度の交遊を持っていたのかを見ることができ、三つには限られてはいるが各人の情報が皆無というわけではなく、書簡その他で何らかの交流実態をうかがうことが可能であることによる。もちろん、こうした特定の身分・職業といった区切りでは兼葭堂の交遊全体を見通すことはできないが、ひとまず武士という括りで「有名」「無名」を問わず兼葭堂の交遊範囲を示してみたい<sup>2)</sup>。

紙数の関係から、本稿では番方の武士のみを取り上げ、役方の武士や来坂大名などについては別稿とする。稿中では目安となるよう、八木巽処(20)というように、『日記』に記載される概数を( )に入れて示すこととする。人名を複数挙げている場合、人名の順序は概ね初出が早い順である。

一 番方の武士

(一) 大坂城代家臣

官職名や仕官先が記されている者の多くは、役職上の理由から大坂に赴任している大名・幕臣および陪臣である。本章ではまず、大坂城の警固のために編成されている番方である大坂城代・定番、大番、加番とその周辺から見ている<sup>(3)</sup>。

大坂勤番の番方のうち、最も重職は大坂城代である。城代の任期は不定で、『日記』と重なる期間には八名が在任しているが、『日記』には城代の名前は見られず、城代家臣の出入りのみ確認できる。

表1にあるように、三名の城代の家臣が兼葭堂を訪れている。

青山の家臣のうち、最初に兼葭堂を訪ねた秋鹿と河合は「八木兵太案内」(「」内は『日記』からの引用。以下同じ)、すなわち兼葭堂とごく親しい儒者で画人の八木巽処(20)が案内人となって兼葭堂を訪ねている。また、八木玄説、石

表1 大坂城代家臣

城代名	在任年代	在任期間	『兼葭堂日記』に記載される家中
戸田因幡守忠寛 7万7000石余 下野宇都宮	天明2(1782)・9・10 ～同4・5・11	1年半	堀善大夫(1)・松野吉兵衛(1)
松平右京亮輝和 8万2000石 上野高崎	寛政10(1798)・12・8 ～同12・9・20(卒)	1年半	猪野喜兵衛(1)
青山下野守忠裕 5万石 丹波篠山	寛政12(1800)・10・1 ～享和2(1802)・10・19	2年	秋鹿準左衛門(9)・河合杏庵(1) 彦坂平四郎(4)・八木玄説(13) 石井庄介(4)・一瀬多善(2) 山崎栄三郎(1)・亙理源太郎(1) 湊倉沢(1)

\* 知行高・居所・任免年月日は『柳宮補任』『寛政重修諸家譜』による。  
\* 人名右( )内の数字は『兼葭堂日記』に記載される概数(以下の表同じ)。

井、亘理らは高三喜兵衛(9)という人物を同伴することがあるが、高三喜兵衛は南本町二丁目堺筋西側で煙硝を商う豊後佐伯藩の蔵元で、『日記』では寛政六年(一七九四)から見られる人物である。<sup>(4)</sup>『日記』初出記事には「佐伯出入高三喜兵衛来、趙仲穆ノ事」とあり、ここにいう趙仲穆は元代の書画家、趙雍(字仲穆)で、書画家・詩人として著名な趙孟頫(字子昂)の子である。したがって、兼葭堂とは中国書画を通じた交流をもっていたと考えられる。青山の家臣は、戸田因幡守や松平右京亮の家臣とは異なり、すでに兼葭堂と親しい八木異処や高三喜兵衛を介して兼葭堂と面識をもち、それを機会にほかの家臣も出入して、数度にわたり兼葭堂を訪れている者もいる。篠山藩主である城代の青山忠裕は、藩校を拡充して文武にわたる藩士教育を奨励し、後には蘭方医の登用や砲術の研究、藩窯の開窯なども行った人物であり、好学の藩風が藩士たちの来訪理由のひとつと推測される。

『日記』では城代との直接交際のあとは見られないが、全く関わりがなかったわけではない。泉屋住友吉左衛門(友紀)が兼葭堂に宛てた書簡<sup>(5)</sup>には、「御城代様唐蛮物御好之由被仰下、御家老団之助殿にて者無之候哉」とあり、城代が唐・蛮物好みであることを、兼葭堂が京都の吉左衛門へ伝えていたことがわかる。この城代は松平右京亮輝和、「家老団之助」は菅谷団之助にあたる。書簡には続けて、「二足三銭」で斡旋した時計を城代側から返品され、請取代金を返金させられた吉左衛門が、兼葭堂の方へは代金がきちんと支払われているのかすらおぼつかないと心配しており、兼葭堂が城代に物品の世話をしていたことがわかる。当時兼葭堂は文房具など唐物を多く扱っていたが、諸大名の求めに応じて様々な渡来品を調達していた。松平右京亮との間では書画をめぐる交渉もあったことが、兼葭堂の『真蹟石刻題跋縮字』(関西大学図書館所蔵)に書き留められており、<sup>(6)</sup>おそらく城代側は兼葭堂に中国書画や西洋渡来品の斡旋を求めたのであろう。書簡では、吉左衛門は城代方の家老と接触しており、兼葭堂も幕府要職の地位にある城代と直接会うことはなく、城代家臣を通じて交渉を進

表2 大坂定番

定番(太字は面会記事のある者)	担当場所	在任年代	在任期間	『兼葭堂日記』に記載される家中
井上筑後守正国 1万石 下総高岡	京橋口	明和4(1767)・11・8 ～天明8(1788)・3・22	20年	辻秀慶(1)
稲垣長門守定計 1万3000石余 近江山上	玉造口	天明元(1781)・10・12 ～寛政3(1791)・10・13	10年	松本平馬(取次役)(58) 粥川升(家老)(2)
保科越前守正率 2万石 上総飯野	玉造口	寛政3(1791)・10・23 ～享和元(1801)・5・20	9年半	宮崎元彧(藩医)(9)
<b>安部撰津守信亨</b> 2万200石余 武蔵岡部	京橋口	寛政7(1795)・4・14 ～文化元(1804)・9・27	9年	菊地安太夫(家老)(15) 菊地真兵衛(公用人)(10) 浅見林蔵(料理人)(1)

\* 任免年月日は、『大坂定番記録(一)』巻末附録「大坂定番(玉造口・京橋口)一覧」(『徳川時代大坂城関係史料集』第四号、大阪城天守閣)に採用されているものを採った。

めていたものと思われる。

## (二) 大坂定番

大坂定番は、城代に次ぐ役職で定員は二名、一、二万石の譜代大名が任命され、大坂城の玉造口と京橋口の二カ所を守衛した。任期は定まっておらず、役料は三〇〇〇俵、自らの家臣団とは別に、与力三〇騎と同心一〇〇人が配下に付けられる。役宅は、大坂城二之丸内に上屋敷があるほか、城外に中屋敷(大手口東側)と下屋敷(鴨野)の二カ所があった。『日記』と重なる時期に在任しているのは七名である。

このうち、定番在任中に兼葭堂と直接の交際があるのは、寛政七年(一七九五)から京橋口定番を勤めた安部撰津守信亨一人である。他に、三名の定番の家臣が出入りしている。

安部撰津守(60)はこれより以前、天明六年(二七八六)に加番として大坂に赴任しており、兼葭堂との交際記事の始まりはその時に遡る。加番在任中は「安部撰津守様」「安部侯」あるいは「安部侯邸」

といった表現であるのに対し、定番在任中はほとんどの場合、「京橋上屋敷」「京橋中屋敷」など役宅の呼称で表記される。兼葭堂の訪問は、城内の上屋敷(4)や鳴野の下屋敷(1)の場合もあったが、最もよく訪れているのは「京橋中屋敷」(25)である。中屋敷の訪問では「早朝二京橋中屋敷行 奥さま御出て」(寛政八年九月七日)、「早朝々京橋御中屋鋪 殿様 奥様御出 晩帰」(同年十一月十一日)とあるように、安部の内室と会うこともあった。定番の赴任は妻子を伴い、通常は上屋敷に起居するが、時には中屋敷や下屋敷に赴く、といった定番の生活が明らかにされているが、これらの記事もそれを示している。寛政八年十月七日には、公用人の菊地真兵衛(10)の案内で、安部の嫡子安三郎(信操)が兼葭堂を訪うている。兼葭堂の方も「家内京橋中屋敷行 初午祭」(寛政八年二月六日)、「京橋中屋敷行 家内とも行」(同十二年閏四月二十三日)、「昼後京橋中屋敷初午行 家内とも」(享和元年二月十一日)というように、初午祭などの際には家族を伴って中屋敷へ赴いている。<sup>(8)</sup>この時期の兼葭堂の書簡中にも「当所御勤番安部侯など、小子義も至而御懇志二御座候、度々御招二御座候」とある。<sup>(9)</sup>祭見物を別としても、兼葭堂が安部邸を訪れる頻度は高く、加番在任時に取り結んだ親しい関係が、定番在任中も続いていたのである。

### (三) 大 番

幕臣によって編成される大番は、十二組に分かれており、江戸城および江戸市中を警護するとともに、二組ずつが一年交替で大坂城と二条城に在番する。各組は大番頭一人と、組頭四人を含む番士五〇人から成り、これに与力一〇騎・同心二〇人が加わった。大坂定番与力・同心や町奉行付属の与力・同心は大坂に居住しているが、大番組の与力・同心は番衆とともに移動し、大坂在番の期間だけ在坂する。これ以外に、大番頭は自らの家に仕える家臣も連れて行く。『日記』ではこの「家中」の往来が多く見られる。大番頭は旗本役で、役高

は五〇〇〇石ながら格式は大名並とされ、実際には一万石以上の大名も選任された。手当として知行高(本高)と同額の合力米が支給された。大坂勤番の交替は毎年八月である。<sup>10)</sup>

大番に関わる人々の出入りは表3にまとめた通りである。兼葭堂と直接の交際がある大番頭は五名おり、そのなかで最初に名が見られるのは、天明六年(一七八六)に在番した堀田豊前守正毅(30)と花房因幡守正域(6)である。堀田は、後に『寛政重修諸家譜』の編纂にあたって副総裁を務めることになる人物であるが、天明八年と寛政六年(一七九四)にも在番している。あとは、天明九年(寛政元年、一七八九)・寛政七年に在番した近藤石見守用和(5)、寛政十年在番の市橋下総守長昭(9)、寛政十二年在番の遠藤備前守胤富(2)、以上の五名である。

(1) 堀田豊前守

堀田豊前守と花房因幡守が在番した天明六年には、先に触れた安部撰津守が加番に任じられており、三者の名がしばしば『日記』に記されている。この年、堀田は二十五歳、花房は五十六歳、安部は二十九歳、兼葭堂は五十一歳である。安部撰津守は、八月十六日「昼後安部撰津守様御目見」の記事で初めて『日記』に登場し、十八、二十、二十二日と兼葭堂が「旅邸」を訪問している。二十三日に「堀田豊前守様旅邸行」とあって初めて堀田の名が現れ、二十五日には「渡辺次右衛門旅宿二行 安部撰津守様邸へ行 山辺良川殿行 堀田豊前守様旅邸へ行 夜帰ル」とあり、同日に安部と堀田の旅邸を訪ねている。渡辺次右衛門(18)は安部家中、山辺良川(15)は堀田家中の近江宮川藩医である。これ以後はすべて城内での面会となるが、安部も堀田も来坂してすぐ、城入りまでの間に兼葭堂とよく会っている。この後二度ある堀田の在番時も、城入りまでの間に度々兼葭堂を引見しているのは同じである。

堀田豊前守の家中は、堀田が三度大番頭として来坂していることから時期により顔触れに変化があるが、藩

表3 大番頭とその配下および家中

大番頭(太字は面会記事のある者)	在番年度	番組	『兼葭堂日記』に記載される大番頭配下および家中 (下線は配下の番士もしくは同心)
永井伊予守尚伴 7000石	天明4	2	筒井権左衛門(1)
永井美濃守直富 3400石	天明4	3	三橋藤右衛門(1)
堀田豊前守正毅(30) 1万3000石 近江宮川	天明6 天明8 寛政6	11 8 8	加藤善藏(4)・設楽唯右衛門(4)・斎藤又右衛門(17) 岡部弥五右衛門(1)・川治泰(泰)藏(3)・富田半藏(7) 光賀富次郎(5)・松林某(1)・朝比那 <sup>(次子)</sup> 藏(1) 仁木香次郎(1)・光賀孫右衛門(2)・長瀬大助(1) 池田左司馬(1)・山辺良川(藩医)(15)
花房因幡守正域(6) 5000石	天明6	5	樋口小左衛門(用人)(1)・富永善右衛門(用人)(1)
水野河内守忠敏 5700石	天明7	12	大嶋武左衛門(9)
本多肥後守忠可 1万石 播磨山崎	天明8	4	用人(1)*1
近藤石見守用和(5) 3400石余	天明9 寛政7	7 7	内藤昌藏(1)・横山直二郎(1)・佐原立卓(3) 佐原竿司(1)・倉貞哉(15)・榊原伊右衛門(25)
?	天明9	7/10	野村平太夫(2)*2
白須甲斐守政雍 2050石	寛政4	11	石川七左衛門(石川大浪、22)
菅沼織部正定前 7000石	寛政5	12	大嶋勇藏(4)
小笠原近江守貞温 1万石 豊前小倉	寛政8	2	小沢馬頭次(7)
久留島出雲守通同 1万2500石 豊後森	寛政9	6	林定五郎(7)
市橋下総守長昭(9) 1万7000石 近江仁正寺	寛政10	5	寺田半藏(1)・下村松意(10)・中島太右衛門(1) 桜井政藏(桜井雪鮮、4)
新庄駿河守直規 1万石 常陸麻生	寛政10	11	平野多志見(4)・朝比奈伝吉(1)・石川七左衛門(既出)
諏訪若狭守頼伊 5000石	寛政11	12	小野午吉(6)
小笠原近江守貞温 1万石 豊前小倉新田	寛政11*3	2	福田宅左衛門(2)・津田郷左衛門(1) 赤沢善右衛門(1)・多田道節(1)
遠藤備前守胤富(2) 1万石 近江三上	寛政12	4	神山伊兵衛(1)・平野八右衛門(植物方)(1) 幸住春迪(7)・兵藤源六(3)・加納礼甫(藩医)(3)
堀内藏頭直晴 1万石余 信濃須坂	寛政12	8	飯島与五郎(8)・石黒衛守(13)・駒沢式右衛門(1)

\*1 個人名はなし。\*2 七番組若しくは十番組の、与力または同心と思われる。\*3 但し、寛政11年度は京都在番。

医の山辺良川は唯一在番時期のすべてに見えており、兼葭堂が上洛した際にも、おそらく二条在番で在京していた山辺の訪問を受けている。山辺に関する『日記』の記事で注目されるのは、「山辺良川来、澗旭江(淵上旭江、画家)来、同伴熊岳(岡熊岳、画家)へ行、四天王寺行、清寿院会、柴田元徳(医者)・丸山元豊(医者)・工藤元迪(大坂城内)・伴正山(崎門派神道家伴部安崇の門人)先在、熊岳来、雅会、夜帰」(寛政六年十月十六日)という部分で、山辺が兼葭堂懇意の書画家や同好者らと黄檗宗の清寿院で開かれた雅会に参加している点である。山辺は他の文人らとの詩会や画会にも顔を出しており、江戸・大坂・京の文人たちと積極的に交流していたものと思われる。

ところで、表3で堀田家中としてあげた者のうち、加藤善蔵と設楽唯右衛門には「堀田様組」、それ以外は「堀田様家中」「堀田豊前守内」と注記されているので、加藤と設楽は番士かと思われたが、『御番士代々記』(岡野融明編、文政期以降に成立、内閣文庫所蔵)にはその名が見られない。また堀田は、天明六年度は一一番組、天明八・寛政六年度は八番組の大番頭であるが、加藤と設楽は天明六年度に見られるほかに、天明九年に暇乞の記事があるので天明八年度も大坂在勤であったとみられ、組の番士ではなく堀田の家中と考えるのが妥当である。一方、天明八年八月六日欄外に「城内宿ワリ役 江戸仁木香次郎 高麗橋紙屋彦兵衛旅宿 手代案内来訪ノ筈也」と書かれる仁木香次郎(1)は、『御番士代々記』により堀田組(八番組)の番士とわかる。

(2) 花房因幡守

花房は、天明六年十月二十四日に「登城 花房因幡守 安部撰津守 中食 堀田豊前守」とあるのが初出である。この書き方からは時間の流れがわかりにくいだが、例えば「堀田豊前守様邸へ行 ソレヨリ花房因幡守様邸へ行」(天明七年一月二十六日)、「登城 安部侯邸 帰り堀田侯 花房侯」(同年二月十二日)などあるように、書いて

ある順にそれぞれの在所を訪問しているものと思われる。途中、中食をとっているのはおそらく安部のところであろう。このように三カ所とも訪ねることもあれば一カ所だけのこともあるが、登城する際は早朝からのことが多く、帰りに寄り道をしながら暮か夜に帰宅するというのが常のようである。安部と堀田については、翌七年に職務を終えて相前後して離坂する際に「夜八ツ時ヨリ 船ニテ 安部撰津守侯発駕ヲ京橋迄送ル」（八月八日）、「早天伊介方ヨリ出て 堀田豊前守発駕 奉送」（八月十日）と、見送りにも出ている。ただし、『日記』の記事を見る限り、兼葭堂は安部、堀田、花房をそれぞれ個別に訪ねており、三者どうしがとくに親しかった様子はない。三者の名が重なってみられるのは在任期間がほぼ同時期であるからで、三者と兼葭堂は個別の関係にあったと見ることができる。

家中の出入りが多い堀田に比べ、花房因幡守の家中との接触は少なく、兼葭堂との関係は浅かったものと思われる。

### (3) 近藤石見守

近藤石見守は、天明九年（寛政元年、一七八九）、四十一歳の時に一度目の在番をしている。兼葭堂と初めて会ったのは寛政二年四月二十一日で「早朝々城内へ行 中小屋 近藤様御目見 雨甚 城内止宿」とある。近藤と面会したのが、大番組頭屋敷でなく加番の屋敷のひとつである中小屋となっている点をどう考えるかであるが、おそらくこれは、この年に加番を勤めた増山河内守正賢が中小屋加番であって、近藤がそこへ出向いていた時に兼葭堂と会ったということと想像される。というのは、五月二十五日に「増山河内守様 松平日向守様 近藤石見守様 御目見」（松平日向守直紹はこの時加番）、六月十二日に「御札幌恐悦二行 行カケ増山侯 近藤侯出会」とあり、近藤と増山との関係をうかがわせる記事がほかにも見られるからである。兼葭堂が城内に止宿してい

るのも、中小屋すなわち増山のところであろう。六月一日の記事にも「早天ヨリ登城 増山侯邸 四ツ時ヨリ近藤石見守様邸 御招ニて行 中小屋宿」とあって、増山邸に参上した後、招かれて近藤を訪ね、再び中小屋の増山邸にもどって宿泊したと読むことができる。これらの記事は、兼葭堂ととくに親しい増山との関係を示すものでもある。

近藤の二度目の在番にあたる寛政七年（一七九五）は、あいにく『日記』が現存していないため、着坂前後の様子は不明である。翌八年に入っても近藤との面会記事はないが、離坂の見送りには出向っており、何らかの交際は続いていたものと思われる。近藤はこの後九月に大番頭から駿府城代に転出している。

近藤の家中のうち、榊原伊右衛門については、経歴は不明ながら帰府後の寛政九年五月に兼葭堂に出した書簡が残っており、その内容から近藤重蔵（号正齋）と懇意で、琉球人の記録や古写本『将門記』の話題を兼葭堂と共有する人物であるとわかる。<sup>(1)</sup> また、江戸への手紙・届け物の便宜を図ったり、江戸での珍しい出物の情報や共通の友人の様子を知らせるなど、兼葭堂と江戸の情報・人脈をつなぐ重要な存在である。なお、この書簡によつて兼葭堂が大坂で近藤重蔵と面会し、重蔵を篤学の人物と評していたことがわかるが、残念ながら該当する寛政九年の『日記』は欠けており、面会した日の様子を確認することはできない。

(4) 市橋下総守

市橋下総守は、二十六歳にあたる寛政十年（一七九八）に在番している。『日記』での初出は同年九月十四日で、「御城内西小屋市橋下総守御目見」とある。大番は、二組が東と西に分かれて二の丸南側に詰めているので、兼葭堂は西の大口寄りにある西大番頭小屋を訪ねたことになる。翌年離坂する八月まで、ほぼ月に一度、二十五日前後に市橋邸を訪れ、時には早朝から晩までを過ごすこともあった。

市橋には、自らの撰編に成る桜の図譜、『花譜』（五帖、享和三年）文化元年に順次成立、宮内庁書陵部所蔵）がある。一帖目に添えられた市橋の序文によれば、とくに桜を好んだ市橋は、従来の桜の図譜が不備であるため自ら修譜の意を持っていたが果たせずに行ったところ、兼葭堂が蔵する三熊華顛の写生桜花譜を観たことがきっかけとなり、華顛の原画を写させ一帖目とし、続譜も企図することになったという。三熊華顛（名思孝は京住の画家で桜の写生画を得意とし、『近世畸人伝』の挿絵を描いたことでも知られる。『日記』には「三熊海棠」もしくは「三熊正親」と書かれる人物である。兼葭堂は鶴亭に就いて沈南蘋流の画を学んだが、華顛も南蘋派の画家大友月湖を師としている。市橋は、華顛の桜花譜について、兼葭堂の精しい本草知識と桜の写生を好んだ華顛の画という二つの長技が合わさって、桜の真の姿を伝えていると評価している。都合二四二種の桜が収められた『花譜』の桜を描いたのは、大番同心で画家の桜井絢（号雪鮮、桜井雪館の甥にあたる）という人物であるが、『日記』寛政十年八月二十一日にある「江戸桜井政蔵始来」とあるのがその人である。政蔵はこの年度の在番中に四度兼葭堂を訪ねており、そのどこかで華顛の桜花譜を借写したものと思われる。

市橋は、若年から学問を好んで経史に通じており、すでに寛政八年には藩校日新館を創設し、藩士子弟に学問教育を奨励した。また善本を収集したことも知られており、文化五年（一八〇八）に蔵書のうちから宋版一六種、元版一四種を昌平坂学問所に献納している。その集書は享和末年から文化初年に集中しているとされ、兼葭堂とは年も離れ交流の時間も限られているが、本草家・蔵書家として多くの知識を蓄積していた兼葭堂から少なからず影響を受けたはずである。

市橋家中の中では、下村松意（10）が在番終了後の寛政十二年四月にも来坂し、兼葭堂宅に止宿している。

(5) 遠藤備前守

遠藤備前守は、四十歳にあたる寛政十二年（一八〇〇）に在番している。『日記』では翌享和元年四月九日「東小屋遠藤備前守様行」の記事と、八月十四日「遠藤備前守発駕」の記事にとどまる。しかし来訪した家中を見ると、平野八右衛門（1）に「植物方」の注記（享和元年一月二十日）が、加納礼甫（3）に「遠藤備前守様御医者」「黄蓮御用来ル」の注記（享和元年二月三日）がある。黄蓮は干した根が消炎・健胃剤などとして用いられる薬草であるが、兼葭堂は書物上の知識として本草に詳しいだけでなく、自宅に薬園をもち、薬材の入手・斡旋や薬剤の調合なども行っていたことから、それらに関連した要件で植物方の役人や藩医が兼葭堂を訪れたものと考えられる。

兼葭堂と面識をもった大番頭と、その配下・家中については以上である。次に、兼葭堂に出入りしたことがわかるその他の主な番士・同心や家中に触れておきたい。

(6) その他の番士・同心、家中

天明八年（一七八七）四月十五日に兼葭堂を訪ねた大嶋武左衛門（9）は、記事本文に「城内水野河内守組 大嶋武左衛門 植物好始来」、欄外に「江戸四ッ谷大木戸大番丁 同心大嶋武左衛門 江戸四ッ谷山伏丁 大久流徳門人」とあることにより、天明七年度の在番である水野河内守忠敵組の同心で、四ッ谷大木戸大番町に住み、山伏町の大久保流徳の門人であることが知られる。師の大久保流徳は、詩作を好み本草学をよくした人物であることが、友人である大田南畝の『一話一言』に記された墓誌からわかり、武左衛門もまた本草に関心を持つ者として兼葭堂を訪ねたことがわかる。本草に詳しい兼葭堂の名が江戸の同好者の間でも知られ、関心を引いていたことがうかがえる。寛政六年（一七九四）には、武左衛門の子息勇蔵（4）も大坂在番で兼葭堂を訪れていて、

後年に京都在番中の同心、中里忠二郎(一)が「武器御用」で来坂した際には、勇藏の紹介状を持参して兼葭堂を来訪している。

寛政九年(一七九七)在番の久留島出雲守通同家中の林定五郎(七)は、在番中の三月から五月にかけて名前が見られるが、享和元年(一八〇一)にも記載がある。享和元年は、九月十四日の欄外注記に「豊後森久留嶋祥丸邸 林定五郎留主居登り使来」と、林が留守居と書かれている。これは、森藩では通同の死により寛政十年十月十日に嫡子祥丸(通嘉)が家督相続し、この度は藏屋敷留守居として上坂してきたためである。<sup>(13)</sup> 九月十四日欄外の記事は、林の上坂を告げるために使者が兼葭堂を訪れたことを示しており、林自身は十月十五日に兼葭堂宅を訪れている。在番勤務後にもつながりが続く一例である。

寛政十二年(一八〇〇)に在番した堀内藏頭直皓は、寛政元年に青屋口加番として大坂に在勤したことがあり、家中の石黒衛守<sup>(13)</sup>はその折には一度兼葭堂を訪ねただけであったが、大番勤務中に時折来訪している。享和元年八月二日に「石黒同伴 寒山寺 奉時追善」という記事があり、奉時、すなわち蛙の画を多く描いて知られる大坂の画家松本奉時(通称周介)の一周忌に兼葭堂が石黒を伴って赴いており、画人としてのつながりがあったものと推測される。

最後に、石川七左衛門<sup>(22)</sup>を挙げておきたい。石川七左衛門は、西洋書の挿し絵の模写に優れた洋風画家で、蘭学者とも親交のある石川大浪である。大浪は十一番組の番士であり、<sup>(14)</sup> 大坂在番を寛政四年(一七九二)と同十年に勤めている(寛政四年は白須甲斐守政雅組、十年は新庄駿河守直規組)。『日記』では、寛政五年三月十三日から八月十五日の期間と、同十年八月一日から十二年八月十一日までの期間に往来があり、寛政十年度は在番を終えても大坂にとどまっていたことがわかる。ただ、寛政十一年七月十六日に暇乞に訪れた記事があるので、当初は在番終了後に江戸へ戻るつもりであったのが、何らかの事情で在坂を続けることになったようである。大

浪は、江戸の蘭学者と親しかった上、大坂や京都を行き来する役目柄、江戸と京坂の知友との間をつなぐ役割も果たした。たとえば、最後に離坂する前日に、大浪が京都の漢蘭折衷医である小石元俊に宛てて出した書簡には、元俊が杉田玄白の養子伯元を通じて大浪に依頼していたヒポクラテス（古代ギリシャの医聖）の画像が出来る上がり、兼葭堂のもとに届けておいた旨が記されており、また大槻玄沢が兼葭堂に宛てた書簡には、編集中の『蘭畹摘芳』を兼葭堂に見てもらうため、大浪を通じて兼葭堂に届けるよう手配した旨が記されている。<sup>15</sup>兼葭堂旧蔵の大浪筆「西洋婦人像」（神戸市立博物館所蔵）は有名であるが、兼葭堂自身も「泊夫藍（サフラン）真形倣西洋図」の作品があるように西洋画への関心が高く、大浪と兼葭堂は画、とくに洋風画を通じてつながりをもつとともに、三都の蘭学者やその周辺との情報交換という面でも重要な関係を見ることが出来る。

ここまで、大番勤務に伴う来坂中に兼葭堂と往來のあつた者を取り上げてきた。兼葭堂と交遊がある大番頭の家臣の出入りが多くなっているのは、やはり主君と兼葭堂との交流を背景としたものである。一方で、兼葭堂と興味関心を同じくする者は、主君と兼葭堂との関係にかかわらず、個人的な関係を築いていることが指摘できる。

#### （四） 加 番

大番の補佐にあたる加番は、山里・中小屋・青屋口・雁木坂の四カ所に配置された。山里は三万石程度、中小屋・青屋口は一〜二万石程度、雁木坂は一万石程度の譜代ないし外様大名が任じられ、役高は山里が二万七〇〇〇石、中小屋が一万八〇〇〇石、青屋口と雁木坂が一万石であった。役高と同額の合力米が支給され、何度も加番を勤める者も多い。任期は一年、交替時期は八月初旬である。<sup>17</sup>

『日記』に見える加番とその家中を一覧にまとめたものが表4である。『日記』と重なる時期に勤番した加

表4 加番とその家中

加番 (太字は面会記事のある者)	在任 年度	担当場 所*1	家中
<b>増山河内守正賢</b> (37)(伊勢長島)	天明1 天明3 寛政1	青屋口 中小屋	野呂見竜(藩医)(28) 諸戸助三郎(16)・戸倉作介(藩儒)(11)・竹下牧多(3) 近藤藤右衛門(御側取次)(2)・十時梅屋(藩儒)(280) ・吉見平八(家老)(1)・野呂見盛(36)
<b>板倉内膳勝長</b> (1)(陸奥福島)	天明3		佐藤三兼(1)・福田蘭台(1)
<b>酒井越前守忠鄰</b> (6)(安房勝山)	天明3		斎藤伸(16)・安藤源左衛門(1) 田中佐次右衛門(1)・上田惣右衛門(1)・弥市(1)
<b>内藤和泉守正純</b> (7)(下総小見川)	天明3		久津見団右衛門(1)・斎木又六(7)
<b>安部摂津守信亨</b> (60)(武蔵岡部)	天明6		渡辺次右衛門(18)・武者彦次郎(21)*2
米倉長門守昌賢(武蔵金沢)	天明7		白土雙儀(1)
大久保山城守忠喜(下野烏山)	天明8 寛政11	山里口 山里口	日高倉太(6)・和田宗循(6) 大塚小十郎(3)・平野文蔵(3)・吉田斧蔵(1)
<b>松平兵庫頭直行</b> (1)(出雲母里)	天明8		(家臣の来訪は無し)
<b>堀左京亮直教</b> (1)(越後村松)	天明8		(家臣の来訪は無し)
<b>柳沢信濃守里之</b> (1)(越後三日市)	天明8		(家臣の来訪は無し)
堀内蔵頭直暗(信濃須坂)	寛政1	青屋口	石黒衛守(12)*3
<b>松平日向守直紹</b> (1)(越後糸魚川)	寛政1		(家臣の来訪は無し)
板倉伊予守勝意(上野安中)	寛政5		海保新五左衛門(6)・本多才介(1)・飯塚喜市(1)
大関伊予守増輔(下野黒羽)	寛政7 寛政12		松本玄春(4)・村上与兵衛(家老)(1)・八木沢勇蔵(2) 蓮見甚蔵(4)・柳瀬太郎兵衛(2)
堀近江守直起(越後椎谷)	寛政7		★里見順甫(9)・相場儀助(3)
内藤大和守頼以(信濃高遠)	寛政9		川地嘉兵衛(3)・中根覚太夫(12) 大久保松盾(22)・奥田栄甫(2)*4
<b>石川中務少輔総般</b> (1)(常陸下館)	寛政10	中小屋	(家臣の来訪は無し)
<b>分部左京亮光実</b> (5)(近江大溝)	寛政11	中小屋	三宅文兵衛(1)・原田周蔵(1)・別所右衛門作(1) 中村作野右衛門(1)・横田升兵衛(1)・別所養寿(1)
<b>稲垣若狭守定淳</b> (12)(近江山上)	寛政12	青屋口	田村茂兵衛(5)・荒川永碩(4)
永井山城守直弼(美濃加納)	寛政12		吉田又右衛門(1)
酒井右京亮忠明(越前敦賀)	寛政12		藤井清兵衛(1)
水野日向守勝剛(下総結城)	享和1		内城茂庵(3)
本多越中守忠誠(陸奥泉)	享和1		天野奎工左衛門(1)
山口周防守弘致(常陸牛久)	享和1		岩倉半次郎(2)

\*1 『兼霞堂日記』に記載のあるもの

\*2 この他、定番勤務時に、嫡子信操(1)が来訪

\*3 この他、大番勤務時に、飯島与五郎(8)・駒沢式右衛門(1)が来訪

\*4 この他、加番勤務と関係なく、享和元年に三村良助(1)が来訪

番のなかで、兼葭堂と面会したことのある大名は十二名おり、安永七年（一七七八）・天明元年（一七八二）・三年・寛政元年（一七八九）に勤番した増山河内守正賢（37）、天明三年勤番の板倉内膳勝長（1）・酒井越前守忠鄰（6）・内田和泉守正純（7）、天明六年勤番の安部撰津守信亨（60）、天明八年勤番の松平兵庫頭直行（1）・堀左京亮直教（1）・柳沢信濃守里之（1）、寛政元年勤番の松平日向守直紹（1）、寛政十年勤番の石川中務少輔総般（1）、同十一年勤番の分部左京亮光実（5）、同十二年勤番の稲垣若狭守定淳（12）である。

このうち、先に少し触れた増山河内守（号雪齋）は、兼葭堂ととくに関係の深い大名である。ともに中国の文人趣味に傾倒し、書画、詩文、煎茶などに造詣が深く、共通する話題が多かった。増山は、兼葭堂の雅友である十時梅厓（儒者・画家）を長島藩儒に登用したり、兼葭堂や十時の友人である北山桃庵（医家・文人）を城内の宴に招くなど、兼葭堂周辺の文人とも積極的に交流を持った。兼葭堂が過釀事件に巻き込まれて咎めを受けた際には、自領内川尻村（現三重県四日市市川尻町）への移居を勧め、屋敷地と薬園地を与えて庇護したことはよく知られており、兼葭堂が亡くなった折には墓碑を撰文して書している。

増山は都合四回にわたり大坂加番を勤めているが、両者の実際的な交流は三度目の在任にあたる天明三年（一七八三）からと考えられる。増山は伊勢長島城内に新たに独楽園という庭園を設けたが、兼葭堂はこの年の五月に増山の依頼を受けて独楽園に寄せる賀詞を作っており、その頃から両者の交流が本格的に始まったと思われる。<sup>18</sup>『日記』での初出は天明三年八月二十六日の御目見記事であるが、兼葭堂はその後しばしば城内の増山を訪れて親しく交流し、翌年に増山が勤番を終えたと同伴して江戸にも下っている。

天明三年度の加番（増山・板倉・酒井・内田）は互いにつながりがあったようで、『日記』には「早朝出て御城内酒井越前守殿行 増山河内守 内田和泉守同席」（天明四年四月四日）、「城内二入 内田和泉守邸二入り 増山河内守 酒井越前守出會 晩帰」（同年六月九日）、「城内 内田和泉守 増山河内守 酒井越前守 板倉内膳 青屋邸出

会」（同年六月十七日）などと、加番が揃って同席している例が見受けられる。中でも酒井は「酒井越前守内上田惣右衛門来ル 書画遣し申候」（天明四年閏一月五日）、「登城 増山河内守席画 酒井越前守同席」（同年二月二十日）と、増山と同じく書画に対する関心が兼葭堂との接点のひとつと考えられ、加えて『日記』では家中の斎藤仲に「唐ノち図かし」（天明三年十二月四日）という書き込みがあつて、地図の収集家でもあつた兼葭堂に借覽を申し出ていることもわかり、兼葭堂が持つ知識や情報に関心を寄せていたことがうかがえる。

寛政十二年在任の稲垣若狭守（二万三〇〇〇石、近江山上）は、初回の勤番ながら来坂してすぐに兼葭堂の訪問を受けているが、これは稲垣と兼葭堂がすでに天明四年九月に江戸で面会する機会があり、それ以来の関係であつたためである。兼葭堂が天明四年に増山河内守とともに江戸へ下つたことは述べたが、兼葭堂が江戸から大坂へ戻る際に増山邸で饒別の宴が催され、そこに稲垣も参会していたのである。宴の参会者は増山、稲垣、朽木隠岐守（昌綱。丹波福知山藩主）のほか、藩儒、書家、画家など江戸の文人墨客十余名であつた。この度の加番を終えて帰府した稲垣は、増山の御抱え画師（江戸詰）で兼葭堂の知友であつた春木南湖に兼葭堂家の様子を伝えており、兼葭堂と増山、稲垣らがその周辺の文人とともに同好のつながりを結んでいたことを示している。<sup>19</sup>

ところで、寛政十二年在番の永井山城守家中の吉田又右衛門には「曾昌啓書状持参」、享和元年在番の本多越中守内の天野全工左衛門には「春木状也」と添え書きがある。これらの状は兼葭堂に会うために携えてきた紹介状である。曾昌啓（名繁・号占春）は薩摩藩医で『成形図説』を編纂した本草学者、春木は既述の長島藩御抱え画師の春木南湖で、いずれも兼葭堂と親しい関係にある。こうした紹介状を持参して兼葭堂を訪ねている場合は、特別な理由があつて兼葭堂と面会を求めたものと考えられる。しかしこれまで見てきた例からもわかるように、家臣の来訪については具体的な情報がほとんどなく、各人がどのような経緯で兼葭堂を訪ねているのかを知ることが困難である。そうした中で、堀近江守（越後椎谷藩）家中の里見順甫（表4の★印）が兼葭堂に宛

てた書簡が一通残されており、交流内容の一端を知ることができる。<sup>20)</sup>

里見順甫は、寛政八年（一七九六）二月十四日を初出として、同年八月四日の暇乞の記事まで、『日記』に九度の来訪が認められる。ただし初出の二月十四日は兼葭堂が外出しており、初対面は三月十七日で、以後ほぼ月に一度兼葭堂を訪れ、そのうち三回は同僚の相場儀助を同伴している。『日記』からわかるのはここまでである。書簡は九月二十五日付で、文中に「去月廿一日道中無滞到着仕候」「勤番中度々伺仕、毎度御懇意不堪感謝奉存候」とあることから、勤番が明けて帰府した後の書簡である。堀が加番を勤めたのは、寛政七年度と十年度の二回あるが、『日記』の記載によれば里見が兼葭堂を訪れたのは初回時だけなので、書簡は寛政八年に書かれたと判断できる。内容は「食鏡之正誤、終日不顧御煩勞、御芘蔭<sup>マカサ</sup>ニ而着後旧友抔江逐一覽候処、校讐之御精核何も絶倒仕候、従今後余力之節、閱本艸和漢之是非可願折衷候」とあり、<sup>20)</sup>「食鏡」の正誤に関する兼葭堂の校合の精確さに「旧友」が大いに感心したことを知らせ、和漢の本艸に関する知見の教示を願っている。里見が蔵書家・本草家としての兼葭堂の知識を求めたことがわかるとともに、ほかにもそうした話題を共有する「旧友」がいること、兼葭堂の教示に大きな信頼を寄せていることが読みとれる。里見は一例であるが、兼葭堂の書画・金石碑文などのコレクションとならんで、蔵書あるいはそれらに基づく兼葭堂の「知」が、来訪目的の多くを占めていたことは容易に想像される。

## （五） 六 役

数は多くないが、大坂城内の六奉行に属する者とその配下とわかる例がある。

天明五年（一七八五）一月十八日に、宮城玄忠門人の高須因齋が案内して九名の「城内百騎衆」が兼葭堂を来訪したが、そのうちの二名、筒井権左衛門（一）と三橋藤右衛門（二）はそれぞれ二番組・三番組の番士で、残り

の七名は大坂城内の奉行とその子息である。すなわち小佐手佐助(1)は具足奉行、太門平兵衛(1)は破損奉行、坂部伝十郎(1)は蔵奉行であり、この三名の奉行とともに番士を経験している。勘定奉行支配となる蔵奉行を除いて、他の奉行は定番支配下にある。そして小佐手佐十郎(1)、同惣吉(1)は小佐手佐助の子、坂部熊三郎(1)は坂部伝十郎の子で、沢半十郎(1)は当時父熊三郎が破損奉行を勤めていた。彼らを案内した高須因齋は、師である宮城玄忠(16)が大坂の町医であるので同じく医家と思われるが、なぜ多くの「城内百騎衆」を兼葭堂に連れたのかも含めて詳細はわからない。

そのほかに御蔵奉行配下の手代である長岡藤次郎(11)と長岡市蔵(7)、難波御蔵番の関根城之助(1)が確認できる。また「城内」とだけ注された者十余名がいるが、所属を特定できるだけの情報がなく現時点では不明とせざるを得ない。

## おわりに

ここまで、煩瑣ながら『兼葭堂日記』に記される番方の武士およびその家中を拾い上げて概観してきた。兼葭堂は当時の大坂を代表する文人の一人であり、交友が多いことは知られながらもその広がり自体については検討されたことがなかった。兼葭堂と各人との関係は、それぞれの意義を掘り下げる必要があることは言うまでもないが、本稿では兼葭堂のあり方を考える一つの方法として、兼葭堂の交際範囲に注目した。

『日記』は人名簿形式であるため、来訪者の詳細や来訪目的まで知ることは難しいが、『日記』に記載される数が多い人物ほど、兼葭堂と文事や学問にわたる交流を持っている場合が多く、一方で、『日記』に記載はされていてもその時限りという者が少なからずおり、兼葭堂という人物に対する興味からとりあえずの面会を

求める者も多かったといえよう。

兼葭堂は蔵書や収集品によって和漢洋の文物に通じており、とくに書画や本草学は人びとの関心を引くものであった。番方の武士たちは公務のため大坂に赴任したが、同好の者たちは地位にかかわらず上坂の機会をとらえて兼葭堂との交流を求めたものと思われる。兼葭堂の交遊の中で役方の武士やその他の大名などとの交遊も大きな部分を占めており、全体の意義については別稿とあわせて考えたい。

註

- (1) 原本は大阪歴史博物館および花月菴所蔵。翻刻は、水田紀久・野口隆・有坂道子編『完本兼葭堂日記』（藝華書院、二〇〇九）。
- (2) 本稿では、儒者や医者、画家など、特別の職務をもって幕府や藩に抱えられる者も、「家中」ととらえられていることからひとまず検討の対象とした。彼らの中には、登用されて初めて武士身分となる者や、辞職などによりそれを失う者、あるいは途中で仕官先を変える者などもあるが、基本的に『日記』に記された時点の身分・仕官先で判断した。
- (3) 各役職について概説した部分は、『日記』が書かれた時期に該当する十八世紀後期段階のものである。また大名・旗本などの知行高・居所・生没年は『寛政重修諸家譜』による。
- (4) 安永六年（一七七七）版『難波丸綱目』で豊後佐伯（毛利和泉守高猷）の項に「蔵元 南本町二丁目 高三喜兵衛」、また後年となるが文政三年（一八二〇）版『商人独買物案内』に「高三季兵衛 白焰硝所 鉄砲業 南本町堺筋西側」とある。
- (5) 『寛政十年（一七九八）十二月十九日付。木村兼葭堂来翰集』『先人旧交書牘』（中尾松泉堂書店、二〇〇四）所収。
- (6) 前掲注（5）『先人旧交書牘』所収。水田紀久「木村兼葭堂宛て住友吉左衛門書翰」（『住友史料叢書月報』一九、思文閣出版、二〇〇四）

(7) 『大坂定番記録(一)―万延元年一月〜十二月、京橋口定番本多忠鄰―』卷末解説(『徳川時代大坂城関係史料集』第四号、大阪城天守閣、二〇〇一)

(8) 『兼葭堂日記』において「家内」という場合、家の内の者⇨家族という意味で使うことが多く、その場合は同居する正妻、側妻、娘、使用人を含むが、「家内」という表現だけでは家族を指すのか妻妾のみを指すのかは即断できない。初午祭には娘も連れて行ったと考えられるので、ここでは家族と解釈しておく。

(9) 『寛政八年(一七九六)十月十五日付竹田孫介宛て書簡。大阪歴史博物館所蔵。』

(10) 『大坂大番記録(一)―弘化二年八月〜弘化三年七月、西大番頭本多忠鄰―』(『徳川時代大坂城関係史料集』第三号、大阪城天守閣、二〇〇〇)

(11) 榎原伊右衛門は、この後享和元年(一八〇一)にも来坂している。この年は近藤が率いていた七番組の大坂在番にあたるが、八月五日に上坂した榎原は「糸ヤ市兵衛」(伏見両替町四丁目の書肆、糸屋市兵衛か)に旅宿をとっている。番士でないとするば榎原が大番組付属与力の可能性もあるが、榎原と七番組との関係については、なお検討を要する。兼葭堂宛ての書簡は、『寛政九年(一七九七)五月四日付、前掲注(5)』『先人旧交書牘』所収。

(12) 大田南畝『一話一言』の中に「大久保流徳翁墓」の項があり、「大久保流徳翁、名正貞、字君節、文化十二年乙亥八月廿日、葬于目白大仙寺。幼名牛太郎、中比總髮、後剃髮、好詩、善本草家学、内山傳三淳時先生門人也」と記されている。大久保流徳、また大田南畝も師事した内山伝三(号賀郎)は、和漢学に通じた歌人で、本草知識を備えた人物であった。

(13) 享和二年版『大坂武鑑』(京都大学附属図書館所蔵)に「豊後森久留嶋祥丸 一万二千石 蔵屋敷留守居 林定五郎」とある。

(14) 勝盛典子「石川大浪と孟高について―その伝記と画業―」(『大和文華』一〇五、二〇〇二)

(15) 多治比郁夫「小石家各代とその交遊」(『究理堂の資料と解説』究理堂文庫、一九七八)、勝盛前掲論文、上田穰「洋風文化の受容と伝播」(『日本洋学史の研究』VI、創元社、一九八二)

- (16) 前掲注(5)『先人旧交書牘』所収。拙稿「木村兼葭堂の交友と知識情報」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一一六号、二〇〇四年三月)
- (17) 松尾美恵子「大坂加番制について」(徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四九年度)および『大坂加番記録(二)——安永九年八月〜天明元年八月、雁木坂加番京極高久——』(『徳川時代大坂城関係史料集』第一号、大阪城天守閣、一九九七)。なお、同史料集巻末に「大坂加番大名一覧」が附録されている。
- (18) 拙稿「増山雪斎と木村兼葭堂」(『混沌』三〇、二〇〇六)、「独楽園賀詞帖に見る文人交流」(『長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖』、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター、二〇〇九)、「木村兼葭堂の交流——四侯和牘にみる——」(『大阪商業大学商業史博物館紀要』一三、二〇一三)
- (19) 「御家族様方へも御健にて御暮被成候旨、稲垣若狭守殿帰府候て委曲承知候」(享和元年(一八〇一)十月晦日付兼葭堂宛て春木南湖書簡。前掲注(5)『先人旧交書牘』所収。
- (20) 前掲注(5)『先人旧交書牘』所収。